

2017(平成29)年4月3日

「第9回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」
受賞者決定および表彰式開催のお知らせ
日本のスポーツを支える2名の「縁の下の力持ち」を表彰

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)は、平成28年度「第9回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」(後援:公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会)の受賞者を決定しました。本賞はスポーツ振興に多大な実績を残すとともに、社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰するもので、「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てているのが特徴です。また本賞は「功労賞(長年にわたるスポーツ振興への貢献や先駆者として実績を上げた人・団体を表彰)」と「奨励賞(今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待され、その年に極めて高い成果を上げた人・団体を表彰)」で構成されます。

なお、表彰式を平成29年4月21日(金)に如水会館(東京都千代田区)にて開催します。

第9回受賞者のご紹介(敬称略)

[功労賞] 今村 大成 (いまむら たいせい)



日本若手卓球選手の武者修行を支え続ける
「デュッセルドルフの父」

株式会社タマス 取締役/Tamasu Butterfly Europa GmbH 社長

推薦者: 公益財団法人日本卓球協会 星野一朗専務理事

[奨励賞] 野口 智博 (のぐち ともひろ)



障害者スポーツ全体の課題に先鞭をつけた挑戦
～トップ選手の指導からパラアスリート強化の現場へ～

日本大学文理学部 教授/木村敬一選手パーソナルコーチ

推薦者: 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会

※この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。(担当:山本)

■ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 概要

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰し、受賞者のたゆまぬ努力と成果に敬意を表するものです。競技、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどさまざまな分野において功績を挙げた「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てるとともに、受賞者の実像を通してチャレンジすることの尊さや、「努力は報われる」という信念を社会に広げることをめざした表彰制度です。

	対象	選考のポイント	賞金／副賞
功労賞	長年にわたるスポーツ振興への貢献や、先駆者として実績を挙げた人・団体	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的な取り組みであること。たとえば指導者、研究者、審判、ジャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体の底上げに貢献した活動など。	賞金 100 万円 (団体は 200 万円)
奨励賞	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、その年、極めて高い成果を挙げた人・団体	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を受けた賞賛に値する取り組みであること。たとえば世界レベルの成果を発揮するにあたり、重要な役割を果たした指導者、研究者、サポートメンバー、審判、ジャーナリストによる活動など。	賞状・メダル 副賞

■選考委員会（敬称略／五十音順／平成 28 年 3 月 31 日現在）

選考委員長	浅見俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
選考委員	伊坂忠夫	立命館大学スポーツ健康科学部 学部長 教授
	衛藤隆	東京大学 名誉教授、大阪教育大学 客員教授
	遠藤保子	立命館大学産業社会学部 教授
	景山一郎	日本大学生産工学部 教授
	川上泰雄	早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
	北川薫	梅村学園 学事顧問、梅村学園・中京大学スポーツ将来構想会議 議長
	草加浩平	東京大学大学院工学系研究科 特任教授
	小島智子	追手門学院大学 客員教授
	定本朋子	日本女子体育大学大学院 研究科長、基礎体力研究所 所長 教授
	篠原菊紀	諏訪東京理科大学共通教育センター 教授
	杉本龍勇	法政大学経済学部 教授
	高橋義雄	筑波大学体育系 准教授
	福永哲夫	東京大学 名誉教授、鹿屋体育大学 特任教授
	増田和実	金沢大学人間社会研究域人間科学系 教授
	丸山弘道	株式会社オフィス丸山弘道
	村田亙	専修大学ラグビー部 監督
山本裕二	名古屋大学総合保健体育科学センター 教授	
ヨコ セッターラント	嘉悦大学女子バレーボール部 監督	

※競技団体、大学、報道機関、ジャーナリスト等から候補者の推薦を募り、2回の選考委員会を経て決定

第9回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 [功労賞]

日本若手卓球選手の武者修行を支え続ける 「デュッセルドルフの父」

いまむら たいせい

今村 大成 (1957年生・富山県出身) 株式会社タマス 取締役/Tamasu Butterfly Europa GmbH 社長

1984年、卓球用品メーカー(株)タマスの社員として欧州現地法人に赴任(当時27歳)。以来、現在に至るまで33年にわたってドイツに在住。1997年、松下浩二選手が日本人として初めて卓球ブンデスリーガへの挑戦を決意すると、所属クラブ探しや契約時の通訳、また生活全般において公私にわたるサポートを行った。以来、ブンデスリーガに参戦する日本人選手が徐々に増え、自社契約選手であるなしに関わらず、その都度、サポートに駆け回った。2002年になると、日本卓球協会(JTTA)による中高生年代を対象とした海外派遣による強化が活発化。その多くはドイツに渡り、岸川聖也選手や水谷隼選手が今村氏を頼って強化に励んだ。これまでドイツ武者修行で今村氏のサポートを受けた日本人選手は男女合わせてじつに50人を超え、親心ともいえるその献身的なボランティア精神に、多くの選手たちが感謝の念を抱いている。

| チャレンジの足跡 | 1982年に(株)タマス入社。1984年に27歳で同社の欧州現地法人に赴任し、以来33年にわたってドイツに駐在。現在はタマス・バタフライ・ヨーロッパ社長。

バルセロナ五輪、アトランタ五輪、シドニー五輪で活躍した松下浩二選手が、日本人初となるブンデスリーガへの挑戦を決意したのは1997年。(株)タマスの契約選手だったこともあり、所属クラブ探しや契約時の通訳といったサポートを行った。松下選手は「自宅に招いていただいて、ハンガリー人の奥様がつくる和食を食べながら日本語で話せることが何よりのリフレッシュとなった」と振り返る。こうしたサポートを受けた松下選手は、ボルシア・デュッセルドルフに所属した1999-2000シーズンにヨーロッパチャンピオンズリーグで優勝するなど活躍した。

その背中を追うように、やはりアトランタ五輪日本代表の田崎俊雄選手(後にシドニー五輪、アテネ五輪にも出場)が1999年に渡独。田崎選手は契約選手ではなかったが、「日本人選手の活躍は、日本卓球界の繁栄につながる」と松下選手と同様のサポートを買って出ている。

一方、2001年世界選手権で日本男子が13位に低迷したことを契機に、前原正浩監督(当時、現・JTTA副会長)はジュニア/ユース世代の有望選手たちに世界基準の卓球を身につけさせるため、「小学生ナショナルチームの発足(1期生は当時小学校6

年生の水谷隼選手)」と、「中高生年代の海外派遣」に取り組んだ。こうした中で、2002年、岸川聖也選手と坂本竜介選手、翌2003年には水谷隼選手と村守実選手といった中高生年代の選手が、所属する学校の協力を得てドイツに留学し強化に励んだ。

その都度、今村氏は受け入れ先となるクラブを探し、住居となるアパートや学力向上のための家庭教師の手配、またあらゆる場面での通訳など、まだ若い選手たちの生活面を献身的にサポートした。「本来は協会がやるべきことだったが、当時はそれができなかった。だからこそ、今村さんの存在がありがたかった」と前原氏は振り返る。

以降リオ五輪に出場した丹羽孝希選手や吉村真晴選手など、多数の選手が今村氏のサポートを受けてドイツでの武者修行時代を過ごした。競技レベルや性別を問わず、ドイツで卓球をするために今村氏を訪ねた選手は50人を上回る。

現在では国内外の用品メーカーや所属する学校の支援などで渡航のためのルートは広がったが、日本若手卓球選手にとって重要なパスウェイとなったドイツでの武者修行は、今村氏が存在しなかったらあり得なかった。前原氏はその功績を、「日本人にはできない、反面、日本人にしかできないサポートの在り方」と評し、また「リオ五輪や世界選手権で日本が獲得したメダルのごく一部には、今村さんの縁の下の力持ちとしての貢献がきっと含まれている」と話す。



第9回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 [奨励賞]

障害者スポーツ全体の課題解消に向けたロールモデル ～トップ選手の指導からパラアスリート強化の現場へ～

のぐち ともひろ

野口 智博 (1966年生・島根県出身) 日本大学文理学部 教授／木村敬一選手パーソナルコーチ

顧問を務めていた日本大学の水泳サークルに、北京パラリンピックに日本代表として出場した木村敬一選手が入会。ロンドンパラリンピック後の2013年からは、同選手のパーソナルコーチとして二人三脚でリオでの金メダル獲得を目指した。自身もかつて400m自由形と800mリレーの日本記録を保持していた元トップアスリート。同時に日大水泳部の総合コーチとしてインカレ3連覇に貢献した指導者でもあり、水泳・スポーツトレーニング分野の研究者でもある。そうした豊富な経験と知識に裏打ちされ、また研究者としての探求心にあふれた3年半にわたる情熱的なマンツーマン指導によって、木村選手はリオパラリンピックで2つの銀メダルと2つの銅メダルを獲得。2020東京パラリンピックに向かう道筋の中で、障害者スポーツ全体が抱える「質の高い指導者の不足」という課題に対し、健常者トップスポーツの指導現場で得た科学知と実践知を「全盲」という個性に応用する指導スタイルに挑戦し、成果を挙げた。

| チャレンジの足跡 | 主将を務めた日大水泳部時代は、1500m自由形でインカレ個人4連覇を達成。社会人選手として出場した1990年北京アジア大会では、400m自由形でアジア新記録を樹立した。引退後は日大水泳部のコーチに就任し、インカレ3連覇に貢献。その後、日本体育大学大学院にて体育科学修士となり、のちの水泳指導の糧となる基礎理論を確立していった。

筑波大学附属盲学校(現・筑波大学附属視覚支援学校)時代に北京パラリンピックに出場した木村敬一選手が、一般入試で日大に進学したのは2009年。野口氏が顧問を務めていた水泳サークル(故・古橋廣之進氏が創設した「水泳普及研究会」)に入会した。母校の教員、寺西真人氏に付き添われて初めて日大プールを訪れた木村選手が、「その2日後に一人で来たことに驚いた」と振り返る。

サークル顧問の野口氏と、所属学生の一人だった木村選手の関係が変わるのは、金メダルにあと一歩届かなかったロンドンパラリンピックの終了後。2013年に木村選手のパーソナルコーチとなり、以来、リオでの金メダル獲得をターゲットに二人三脚の3年半がスタートした。

9時から始まる大学の教壇に立つため、選手一人、指導者一人の練習は毎朝6時からスタート。コンディション管理のため、まだ健常者スポーツの世界でも普及していなかった唾液採取を欠かさず行うことも日課となった。タッピング棒を片手に、泳ぎ込みを行う木村選手を先回りしてプールサイドを往復するのも野口氏の仕事(安全確保の観点から後に2名体制に変更)。午後にはフ

ィジカルトレーニングを終えた木村選手と学外のプールで再合流するなど、マンツーマンによる週10回のハードな練習はリオ大会まで続けられた。

「幼少時から全盲の選手は、運動のイメージというものを持っていない。たとえば『ひねる』という運動を表す言葉でも、晴眼者が身に着けている軸を中心に回すという感覚が視覚障害者にはない。「そもそも、まっすぐに泳ぐことが難しい。コースロープに当たりながら、そのコースロープをガイドにして泳ぐ。当然、無駄なパワーを使うことになるので、エネルギーのタンクはより大きくなければならない」。こうした考えから、テクニックよりパワーを重視した指導方針が生まれ、磨かれていった。

そして迎えたリオパラリンピックでは、50m自由形(S11)と100mバタフライ(S11)で銀、100m平泳ぎ(SB11)と100m自由形(S11)で銅と、合わせて4つのメダルを獲得した。その間、2013年のIPC世界水泳選手権では2つの金メダル、2015年の

同大会でも2つの金メダルを獲得している。

「選手としても障害者としても僕のことを理解してくれ、一緒に戦ってくださった。スタート台に送り出す最後の最後まで、常に最善を尽くしてくれた。『ありがとうございます』では語りつくせない、いちばん感謝したい人」と、木村選手。2020年に向け、パワーを重視したこれまでの指導方針から「技術改善」へと方向を転換し、また初めての本格的な高所トレーニングを導入するなど、全盲スイマーの新たな境地の開拓にチャレンジしている。



■歴代受賞者（敬称略）

第1回 平成20年度	功労賞	中野 政美（柔道指導者） 女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展
	奨励賞	丸山 弘道（車いすテニス指導者） 北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ
第2回 平成21年度	功労賞	塚越 克己（スポーツ医・科学研究者） 日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「縁の下の力持ち」
	奨励賞	増田 雄一（アスレティックトレーナー） トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み
第3回 平成22年度	功労賞	高田 静夫（サッカー審判員） 日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用
	奨励賞	中村 宏之（陸上指導者） 雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践 中北 浩仁（アイススレッジホッケー指導者） 強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ
第4回 平成23年度	功労賞	岸本 健（スポーツ写真家） スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献
	功労賞	水谷 章人（スポーツ写真家） 独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力
第5回 平成24年度	功労賞	樋口 豊（フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者） 国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献
	奨励賞	江黒 直樹（ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ） 「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦
第6回 平成25年度	功労賞	臼井 二美男（技師研究員、義肢装具士） スポーツ用義足の第一人者として「走る喜び」を提供する挑戦
	奨励賞	東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部 戦略広報という立場から東京2020招致を支えたプロフェッショナル
第7回 平成26年度	奨励賞	妻木 充法（医学療法士、鍼灸あん摩マッサージ指圧師、日本体育協会公認アスレティックトレーナーマスター） 公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術
	奨励賞	門田 正久（理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、日本障がい者スポーツ協会公認スポーツトレーナー、介護予防主任運動指導員） 障害者アスリートのメディカルサポート環境を拡充する取り組み
第8回 平成27年度	功労賞	藤原 進一郎（日本障がい者体育・スポーツ研究会 元・理事長、日本障がい者スポーツ協会 元・理事、技術委員会 元・委員長、日本パラリンピック委員会 元・運営委員、極東・南太平洋身体障害者スポーツ連盟 スポーツ委員会 元・委員長） 「すべての障がい者の生活者にスポーツを——」その信念を貫いた40年
	奨励賞	中島 正太（15人制男子ラグビー日本代表チーム／7人制男子ラグビー日本代表チーム アナリスト） 先端技術を駆使したデータ分析で、ラグビー日本代表の躍進に貢献